

# 日本人英語学習者の機能語へのストレス誤配置

—データベース音声との比較—

山 本 誠 子

## 1. はじめに

山本（2021）では、日本人英語学習者の文末の代名詞へのストレス配置について調査した。I know this cell phone has various functions, but I can't make full use of them. の them や、I'm just going to look over the menu and think about it. の it は機能語であり、通常はストレスが置かれない。しかし、誤ってストレスを配置する頻度は、音声資料とストレス配置に関する知識を与えた2回目の録音においても減少しなかった。本稿では、ストレスの誤配置がどのような要因によって影響されるかを、データベース音声との比較で検証する。

## 2. 実 験 1

### 2.1 実験文

日本人学生による読み上げ英語音声データベース（略称：UME-ERJ データベース<sup>1)</sup>）に収録された英文（I took her word for it.）を使用し、各語のストレスの有無を判断対象とした。

### 2.2 実験参加者



グループ1は関西の大学に在籍する大学生25名（1年次生・2年次生）で、英語力はCEFRのA2～B1であった。グループ1の参加者には、本実験と後述する実験2で使用した英文を含む5文を自宅等の静かな環境で録音させた。グループ2はUME-ERJ データベースに収録された25名であった<sup>2)3)</sup>。グループ3はUME-ERJ データベースの英語母語話者11名であった。

### 2.3 評価

イギリス英語母語話者1名・アメリカ母語話者2名(全員男性)に、どの語にストレスが置かれているか、音声資料を聞いて判断してもらった。山本(2021)では、文末の代名詞にストレスが置かれているか否かのみを問う形になっていたが、本評価用にサイトを構築し、評価者には下記の画面でストレスが置かれたと判断した語が複数あれば、その選択が可能になるようにした。また、どの語にもストレスを感じないと判断した場合には、noneを選択するよう指示した(noneを選択した場合には、他の語にチェックをすることはできない)。音声資料の順番はランダムに提示した。

### 3. Evaluation

You may check more than one word if you believe multiple words are stressed. If you do not hear any words stressed, please select the box marked 'none.'

<b>Sentence:</b>	I think he wants it.					
No.	I	think	he	wants	it	none
1 	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

### 2.4 結果

評価対象の英文 I took her word for it. においては、内容語は took, word であり、機能語は I, her, for, it である。特に文脈が与えられなければストレスが機能語に置かれることはないのが原則である。図3を見ると、どの評価者も内容語である took と word にはすべての発話についてストレスが置かれていると判断した。一方、機能語については、英語母語話者の発話であっても評価者2が I, for にストレス有と判断しており、評価の不一致も見て取れる。しかし、her と it にストレスは置かれれないという判断では一致している。

図1と図2を比較すると、内容語にはストレス有との判断が一定数観察できる一方、機能語にもストレス有と判断する回答が多いことがわかる。特に文末の代名詞 it には、ストレスの誤配置が顕著である。しかし、グループ1とグループ2には類似した傾向が見られ(表1参照)、グループ間で機能語へのストレス誤配置に差があるとは言えない。

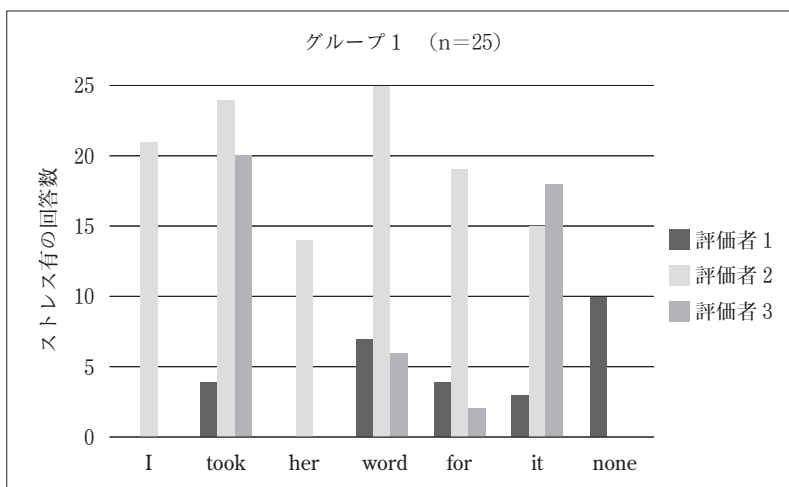


図1 グループ1の評価結果

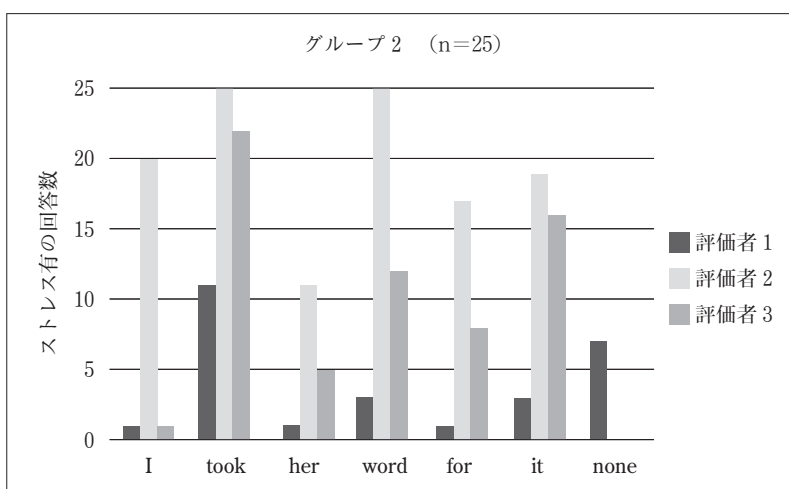


図2 グループ2の評価結果

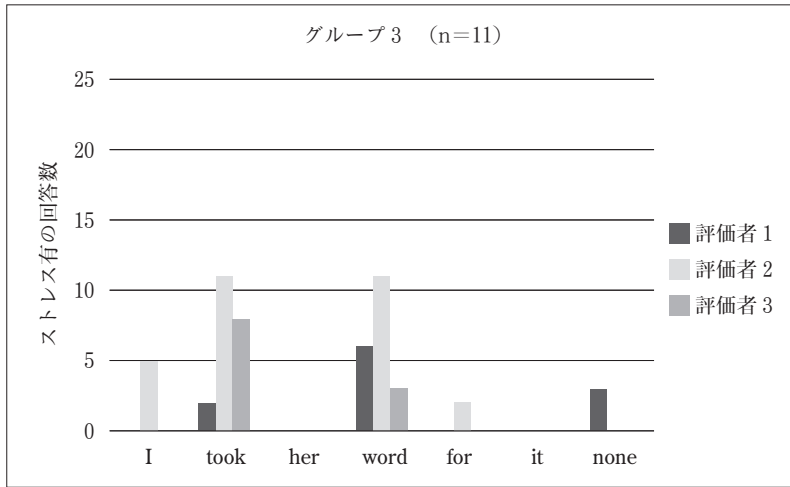


図3 グループ3の評価結果

表1 グループ1・グループ2の回答数合計

	I	took	her	word	for	it	none
グループ1	21	48	14	38	25	36	10
グループ2	22	58	17	40	26	38	7

### 3. 実験 2

グループ間の差についてさらに調査するため、実験2を実施した。

#### 3.1 実験文

UME-ERJ データベースに収録された英文 (I think he wants it.) を使用し、各語のストレスの有無を判断対象とした。

#### 3.2 実験参加者

実験1グループ1の25名 (1年次生・2年次生) と、UME-ERJ データベースに収録された51名 (データベース内の当該実験文の全発話) で、グループ2の参加者とは重複しない (以下、グループ4とする)。

### 3.3 評価

実験1と同じであった。

### 3.4 結果

図4と図5（参加者数に差があるため、%表示にしている）を比較すると、実験1の図1・図2と同様の傾向が見られるが、内容語（think, wants）へのストレス配置率が高い

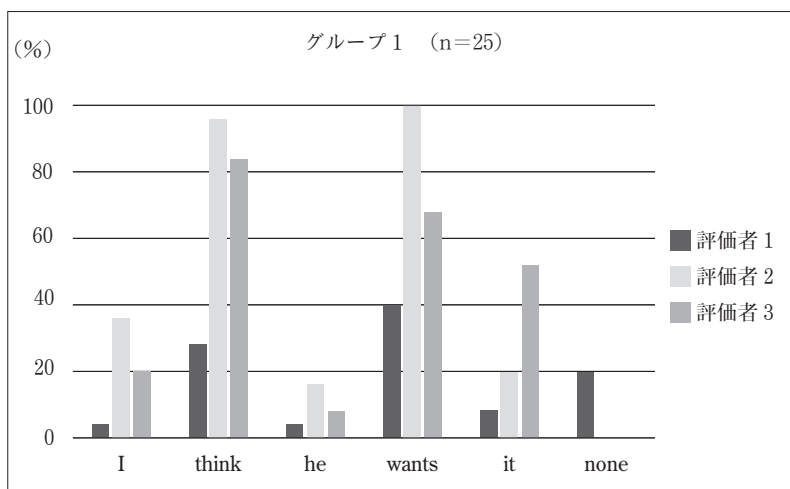


図4 グループ1の評価結果 (%)

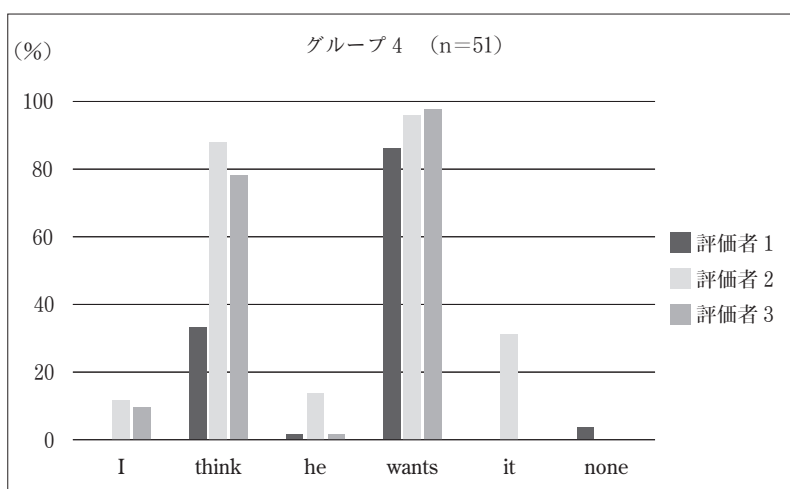


図5 グループ4の評価結果 (%)

ことがわかる。一方、機能語 (I, he, it) へのストレス誤配置については、文末の代名詞 it に特徴がみられる。評価者3名を1つのグループとした時、母比率の検定を実施すると、itのストレス(誤)配置には、グループ1とグループ4の間に有意差が検出された( $p < .05$ )。つまり、データベースの参加者は、文末の it にストレスを置いて読む比率が低く、母集団の特性がその要因である可能性がある。

#### 4. 考 察

実験1では、文末の it へのストレス誤配置には、グループ1とグループ2の間に差がなく、日本人英語学習者にある程度共通してみられる現象であると判断された。しかし、実験2において、グループ4の it へのストレス誤配置は有意に低く、母集団の特性がその結果につながったと考えられる。UME-ERJ データベースの参加者の英語習熟度は資格試験の得点等では示されていないが、参加者が所属する機関群(大学・大学院)からグループ1の参加者とは習熟度に差があると推測される。「話者は準ランダム抽出において選定されており、非常に幅広い英語習熟度の話者を網羅している」とはいえ、集団としての習熟度の差が、実験2の結果(の一部)を説明する要因と考えられるのではないか。

今回の実験でも、評価者の判断に個人差があった。評価者1(イギリス英語母語話者)は、どのグループに対しても none(ストレスなし)と判断したケースがあった。一方、評価者2は、多くの語に高い確率でストレス有と判断するケースがあった。これらの現象は、もしかすると裏表の関係かもしれない。多くの語にストレスがある場合、結果として隣接する語との差がなくなり、flatに感じられる可能性がある。評価者への指示を再考する必要がある。

2つの実験における it へのストレス誤配置について図6を見てみると、同じグループ1の参加者に実験文の違いによる差が観察できる。I took her word for it.の方が、itにストレスがあると判断されるケースが多い。おそらく、文中における it の位置の影響が考えられる。つまり、took, word にストレスが置かれ、かつ単語ごとに弱強のリズムが出現するような読み方では、itにもストレスが置かれる可能性が高い。Hattori(2023)は日本人英語学習者における核配置のパフォーマンスについて、本稿と同じデータベースの音声(本稿で使用した文とは異なる)を音響的に分析し、音調核の誤配置は名詞・代名詞・動詞・前置詞において観察されたとしていると同時に、今までに整理されてきた類型にはない統語範疇でも核の誤配置が生じる可能性に言及している。しかし、統語範疇の観点に加えて、リズム構造等のプロソディの枠組みからも誤配置の要因について考える必要がある。

文末の it にストレスがある場合、聞き手にはどのような印象を与えるか、評価者に自

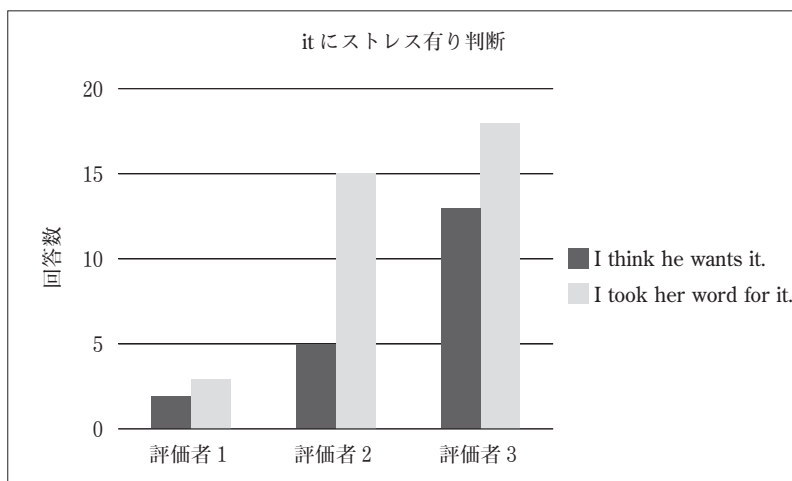


図6 実験1・実験2におけるグループ1のitに関するストレス判断

由記述形式で尋ねたところ、下記の回答を得た。

評価者1：It does depend on the context, but it seems unlikely to place stress on a pronoun unless it's in contrast with another pronoun.

評価者2：Stressing the last word a lot would change the meaning of the sentence a bit. This time it seemed most stress was on “wants”, and a secondary stress on “think.”

評価者3：The stressing of the last “it” in the sentence is definitely unnatural. Although it depends on the accent/origin of the English accent, most speakers of American English would pronounce the final “t” as a glottal stop (hence unstressed).

文脈（例えば他の代名詞との比較）が与えられない限り、itへのストレス配置はunlikelyかつunnaturalに聞こえる上に、文の意味を変える可能性にも言及されていることから考えると、矯正が必要な項目であることがわかる。

## 5. 最 後 に

山本（2021）に引き続き、文末の代名詞itの振る舞いについて観察した。その結果、習熟度の観点からの示唆を得ることができた。今後は、知識/理解と産出の関係を見てい

くことで、音声指導・教育の効果的な実践へとつなげていきたい。

#### 注

- 1) このデータベースには、音素・強勢・イントネーション・リズムに注目した読み上げセットがあり、参加者は録音前に自身が納得するまで練習することができる。中には、ストレス配置があらかじめ示されている文セットがあるが、本稿で使用する英文はこのような指示のないものを使用した。
- 2) 峯松他(2004)によると、話者抽出については「幅広い英語習熟度の話者による音声を収録する必要があるため「発音習熟度が意図的に偏るような選定はしない」という方針の下、各収録サイトに対して話者を準ランダム抽出するよう指示した。特に「希望者を募る」などの操作は行なわないよう、注意した(希望者を募ると比較的発音能力の高い話者のみによるDBが構築される恐れがある)。」と述べている。何らかの英語力の指標となるレベルは示されていないが、データベース構築協力機関をグループ1の実験参加者と比較すると相対的に習熟度は高い集団であると推測される。
- 3) 実験1・実験2で使用された英文を両方とも録音している参加者25名の発話を分析対象とした。

#### 参 考 文 献

- Hattori, T. (2023) The Pronunciation of Performed Tonicity by Japanese Learners of English: Considering Correct Placement of Nucleus. *LET Kansai Chapter Collected Papers*, Vol. 21, 39-57.
- 峯松信明・富山義弘・吉本啓・清水克正・中川聖一・壇辻正剛・牧野正三 (2004) 「英語 CALL 構築を目的とした日本人及び米国人による読み上げ英語音声データベースの構築」『日本教育工学会論文誌』, Vol. 27, No. 3, 259-272.
- 山本誠子 (2021) 「日本人英語学習者の代名詞へのストレス誤配置—文末を対象とした予備調査—」『神戸学院大学経営学論集』第17巻, 第2号, 29-38.